



ニホンカモシカ

発行／青森県立自然ふれあいセンター 〒038-1301 青森県青森市浪岡大字大釈迦字沢内沢1-1  
 TEL 0172-62-4527 FAX 0172-62-8510 URL <http://www.jomon.ne.jp/~bonjyu/> メールアドレス [bonjyu@jomon.ne.jp](mailto:bonjyu@jomon.ne.jp)

## □ 行事レポート □

### ● 秋のふれあいデー 1日目 10月10日(土)



ガイド案内登山、クラフト作りや木登り体験などを通して自然と触れ合いました。

### ● 秋のふれあいデー 2日目 10月11日(日)



旧マンガン鉱までのトレッキングと、コンツェルト・ラフォーレによるコンサートを行いました。

### ● 自然まるごと発表会 11月8日(日)



5名の方がそれぞれ観察した記録や、調査した事などに関する題目での発表を行いました。

### ● 特別講演会「宝石のような蝶 蜂のような蛾」 11月8日(日)



日本鱗翅学会工藤忠氏がシジミチョウやスカシバガなどについての講演を行いました。

### ● クラフト教室「お正月飾り作り」 12月5日(土)



講師の方からアドバイスを受けながらお正月らしさ溢れるリースを制作しました。

### ● 野鳥観察会 清水川漁港 12月13日(日)



清水川漁港と浅所海岸へ行き、ガン・カモ類やハクチョウ類の水鳥を中心に観察しました。

● **マイヅルソウ** 齋藤 信夫（青森自然誌研究会）

マイヅルソウは青森県内であれば、海岸林としてのクロマツ林やカシワ林、里山のミズナラやコナラなどの雑木林、そしてブナを中心とする山岳林、さらに岩木山や八甲田山のような亜高山帯や高山帯の草原や低木林などにも生える、きわめて一般的な草本である。場所によっては地面をすっかり覆ってしまうほどにはびこることもある。そのように、驚くような繁殖力を支えているのは、地下茎を伸ばしながら陣地を広げる能力と同時に、種子でも分布を広げることができるからだろうか。ある研究によると、地面に落ちた種子は、その年の冬を越して根を出し、胚を生長させ、二回目の冬を越してからようやく芽を出すのだそうだ。芽を出してもすぐに花を咲かせるとは限らないのかも知れない。というのも、私達は経験的にマイヅルソウの群落の中には花を咲かせないまま冬を迎える個体がとても多いことを知っているし、そんな個体は花を咲かせた個体に比べると華奢であることを把握しているからだ。

ところで、地上で展開されるマイヅルソウの姿形の変化は実に興味深い。雪解け後の4月下旬、マイヅルソウは槍の穂のような姿で地面から頭を出す。内側にある葉が花の部分の芯にするように巻き込み、それを外側の葉が巻き込み、それをさらに外側の葉が巻き込むという具合に円錐状で地

上にあらわれるのだ。1枚では柔らかい葉でも、巻き込むことによって強度が増すというものである。ちょうど、小さい頃に新聞紙を丸めて刀を作ったときのことを思い出せばすぐ理解できる。

マイヅルソウでは、葉の巻き込みが解除されると、数枚のハート形の葉が付着する茎の先端に、純白の小さな花が沢山咲く。花の時期は5月中旬～6月上旬といえよう。その頃に気づくのは、茎の高さ、そして葉の形や大きさは場所によりかなり幅があり、長短大小様々だということだ。

花が終わると直径5～6mmほどの球形の果実（しょう果）となるが、最初は紫色の斑が入った白っぽい真珠のような雰囲気である。それが次第に水っぽい赤色の果実に変化し、10月中旬頃には地面へと落ちるのだ。その頃の葉はあめ色で溶けるように枯れている場合が多い。ただ、それらの変化を通して感じるのは、花の数の割には熟した果実が少ないかなということ。データを集めても面白いかも知れない。

それにしても、マイヅルソウとはきわめて艶やかな名前である。日本人にとり鶴は特別な野鳥のようで、特に丹頂鶴は代表格である。鶴といわれると多くの人々は丹頂鶴をイメージするのではないかと思う。そんな印象でマイヅルソウを見つめると、ますます良い花だと思ってしまう。



マイヅルソウの花(2018年6月4日)



僅かに残っているマイヅルソウの果実 (2019年9月4日)

生物ごよみ(昨年)		1月												☀️☁️☔️: 昨年の天気		℃: 昨年の気温 (月最高気温)		低: 昨年の気温 (月最低気温)														
日	曜	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
観						コゲラ	アカゲラ・ヒヨドリ	ミソサザイ・シジュウカラ	テン足跡	ホンドギツネ	ヒレンジャク・エナガ	クマタカ	テン足跡	リス足跡	ホンドギツネ・ウン	ヒガラ・ヤマガラ	キレンジャク・シジュウカラ	ブナ冬芽	ヤマドリ足跡	ヤマボウシ冬芽・オオカメノキ冬芽	カワガラス・ミソサザイ	トチ冬芽	ニホンザル	サル足跡・カモシカ足跡	ホンドキツネ	カンボク実	ノウサギ足跡	ヤマドリ	アカゲラ・アオゲラ	カモシカ足跡	イワナシ雷	コゲラ・オオアカゲラ
天						☁️	☁️	☀️	☔️	☔️	☁️	☀️	☀️	☁️	☁️	☀️	☁️	☀️	☀️	☀️	☁️	☁️	☀️	☀️	☁️	☁️	☁️	☀️	☀️	☔️	☔️	☔️
℃		-3	0	2	0	-1	2	3	3	2	3	5	3	1	2	4	1	2	2	5	2	1	5	7	1	-1	2	5	6	4	3	3
低		-5	-4	-3	-3	-4	-5	-8	-2	0	-1	-2	-2	-4	-5	-6	-3	-2	-6	-8	-2	-3	-4	-2	-3	-4	-6	-3	1	1	1	

### ● 梵珠の昆虫「オトシブミ」(オトシブミ科)

鳴海 富美子(津軽昆虫同好会)

体長は1cmに満たないが、この仲間では大きい方である。体はつやのある黒色で、翅の部分が赤色をしており、頭部は雄の方が長く雌は短い。年一回の発生で、春から初夏にかけて揺籃(ゆりかご)を作る。梵珠ではサワグルミに作られていることが多い。作り方は2つあるようで、1つは葉の緑から主脈まで切り込んだ後、反対側の線からも主脈まで切り込むが、主脈の一点で合い、形も左右同じにきれいに切られているのがすごいと思う。(写真1)その後主脈に噛み傷をつけて葉がしおれるのを待って主脈を中心に下から表面を合わせるように折り畳んでいく。そして最後に上部分を反転させて葉の表面が外側に向くようにする。オトシブミには糸を吐く器官は無いので、強く折り畳むことで硬くしっかりした揺籃を作ることができる。卵は葉の下を少し巻き上げて産卵のための穴を開け、そこから普通の1個の黄色い卵を産み込む。揺籃を開いて見る時には注意しないと卵がころが

り落ちてしまう。卵から孵化した幼虫はこの揺籃を食べ、成虫になるまでこの中で暮らす。

もう一つの作り方は葉の切り方で、葉の根本付近から主脈を越えて一直線に切って巻く形のもので、前者は主脈を切って下に落とされるものが多いが、後者はそのまま枝に残っている。梵珠ではこの型のものが多いと思う。春、足元やフキの葉上等あちこちに落ちているのを見ることができる。

揺籃を作るのは雌であるが、葉をしおれさせている間とか作成途中で姿を消してしまうものもいて、中途半端なものもぶら下がっているのを目にすることもある。

オトシブミの名前は昔の人が下に置いておいた巻き物の文に似ていることから名づけられたという。揺籃を作るのに要する時間は速いもので35分位、途中の休憩が長いものだと1時間以上かかる。雌が一生懸命に作っている所を最後まで見ているのは実に楽しい。



オトシブミの揺籃 梵珠 2015.5.27



オトシブミ 梵珠 2015.6.17

生物ごよみ(昨年)		2月		☀️☁️☔️: 昨年の天気		℃: 昨年の気温(月最高気温)		低: 昨年の気温(月最低気温)																					
日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
曜	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
観察できたもの	マヒワ群れ	コゲラ	カワガラス	コガラ・カケス	カケス	オオアカゲラ	アオゲラ・ヒガラ	コガラ・ツグミ	ヒガラ	エナガ・コゲラ	ツグミ	カケス	アカゲラ・カワガラス	キレンジャク群れ	エナガ群れ	ニホンザル	カモシカ足跡	ツグミ・ヒヨドリ	ツグミ	エナガ	マルバマンサク蕾	ニホンカモシカ	コゲラ	カワガラス・フキノトウ	カワガラス・カケス	マルバマンサク開花・コガラ	ホンドリス	エナガ・アカゲラ	エナガ・ヤマガラ
天	☀️	☁️	☔️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️	☁️
℃	2	3	4	0	-1	-3	1	0	-4	-2	0	7	5	8	4	1	8	3	2	5	5	7	4	6	6	3	3	2	6
低	0	-3	-5	-5	-7	-8	-6	-6	-9	-8	-7	-1	-1	1	-2	-2	1	-1	-1	-2	-3	-3	-1	0	-3	-3	-4	-5	-4

# ●タマウラベニタケ

湯口 竹幸（青森県きのこ会）

タマウラベニタケは「タマ」になるだんご状のものと通常の形の子実体とが混在し、近くにナラタケ属子実体があることが多く、これでワンセットだ。名前はこのだんご状の変形と「ヒダのベニ（肉色・ピンク）色」から名付けられた。本菌はハラタケ目イッポンシメジ科に属し、美しいブルー系のナスコン・アイ・ムラサキ・コンイロという名が付くグループと、国内中毒事故が最多のクサウラベニタケ、それと見分けが難しいウラベニホテイシメジ、これらがまとめられたイッポンシメジ属で、イッポンシメジ科の中心的存在である。同様に粉臭をもつイッポンシメジ科にヒカゲウラベニタケがあるが、これは別属で胞子は複数の縦隆起を持ち横断面は六角形である。本種胞子はスジがなく、どの角度からみても不整多角形で少し小さい。ブナやナラの湿った枯れ木を好むらしく、梵珠山では二つの登山口の沢に近い場所にある。どちらも直射日光が当たらず水面に近く、材は不朽が進み摘まむと柔らかく水っぽい。本種の大きな問題は、どちらが寄生しているかだ。20世紀末は本菌がナラタケ類の寄生を受けて奇形状になる

とされていた。確かにだんご状のものは少し脆いが、通常の子実体と同じ色合いで灰白色～灰褐色でありこの説を誰も疑わなかった。だが、21世紀になり接種試験の結果、だんご状のものは本菌によって寄生を受けたナラタケ類だという説が認められている。あのだんごは白くても寄生を受けたナラタケ類で、基物上で寄生された菌糸束が本菌に取り込まれ途切れているという。この生態を利用してナラタケ病の阻止に使えるのではないかと記述がある。2010年以前の図鑑では本菌の傘が開く前にナラタケにより奇形となると断言するものと、一步置いて「寄生を受けているという」二種の記載がある。正確な観察を考えさせるきのこだ。ゴジラは肉食恐竜のティラノサウルスからイメージされて迫力がある。しかし最近の研究では多くのティラノサウルスは超派手な色合いの羽毛に覆われるらしい。子供の恐竜模型はまだ羽がないが、ゴジラが派手になると有難味がない。常識はタマにひっくり返るのが常だ。学名は「abortivus 発育不全の」とつけられている。



タマウラベニタケ（やや老菌）



タマウラベニタケのダンゴ状奇形

生物こよみ(昨年)		3月														☀️☁️☔️☁️☀️: 昨年の天気		℃: 昨年の気温 (月最高気温)		低: 昨年の気温 (月最低気温)												
日	曜	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	
観察できたもの		ヒレンジャク・キレンジャク	ミソサザイ	ヒガラ	ミソサザイ・カモシカ足跡	オオハクチョウ・コハクチョウ	ノスリ	ヒレンジャク・キレンジャク	フクジュソウ開花	コチドリ・ヤマアカガエル産卵	カワラヒワ・ホオジロ	ホオジロ	ミソサザイ・エナガ	エナガ	ベニヒワ	セツケイカワゲラ	カケス・ミソサザイ	カワラヒワ・キジバト	クマタカ・ホオジロ	ノスリ	アカゲラ・アオゲラ	ミスバシヨウ開花	マヒワ・カワラヒワ	フクジュソウ開花	アラゲヒヨウタンボク花	ニホンカモシカ	キクザキイチゲ花・カタクリ蕾	イワナシ蕾	カタクリ開花	オシドリ・コガラ	マヒワ・ヒオドシチョウ	シータテハ
天		☁️	☁️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☁️	☁️	☀️	☁️	☁️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	☀️	
℃		7	8	6	6	7	4	7	11	14	6	10	8	6	4	6	3	8	9	16	10	9	9	7	7	9	10	12	10	8	11	14
低		0	0	1	0	1	0	-1	-2	0	3	0	0	-1	-2	-2	-1	-2	0	-1	3	1	1	-1	-2	-3	0	0	2	-2	-4	-3